

オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

△ルウチナー

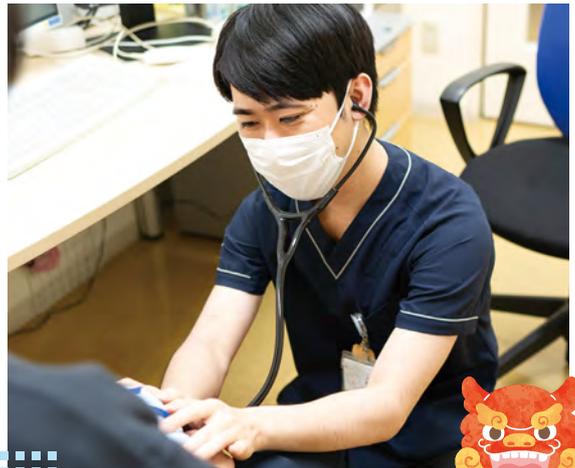
2025

Vol. 13



出生率全国1位の
沖縄の地で未来を創る
子どもたちの笑顔を守り
幸せを追求する、
小児医療の挑戦者たち

沖縄で小児科医になるといふこと





Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で 医師のキャリアを考えるマガジン

沖縄で活躍する医師たちを通して

沖縄の医療と臨床研修の魅力を紹介するマガジン「ムルウチナー」。

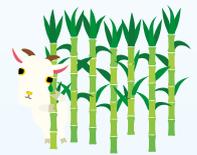
「ムル」は全部、「ウチナー」は沖縄を意味します。

今号の特集は「沖縄で小児科医になるということ」。

出生率全国1位の沖縄という舞台で奮闘する

“小児医療の挑戦者たち”にスポットを当て、

子どもたちの笑顔を支える医療の魅力をお届けします。



INDEX

2025. Vol.13

【特集】

沖縄で小児科医になるということ

出生率全国1位の沖縄の地で未来を創る子どもたちの
笑顔を守り幸せを追求する、小児医療の挑戦者たち



Top Interview

P.02 病院の垣根を越え、沖縄全体で小児科医を支え、育て、未来を創る

沖縄県保健医療介護部長 糸数 公 先生



Special Interview

P.04 離島・全国・世界で活躍できる真に実力のある小児科医を育成

#1 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 医療部長 兼 新生児内科部長 大城 達男 先生

P.06 確かな臨床力、高いリサーチマインド、強い専門性を有する優れた小児科医に

#2 琉球大学病院 小児科 小児科専門医プログラム 担当者 周産母子センター 副部長 准教授 吉田 朝秀 先生



OKINAWA DOCTORS SCENE ~ 沖縄の小児科医 ~

P.08 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 小児部門
#1 専攻医 長谷部 郁 先生 / #2 専攻医 那須 寛生 先生

P.10 沖縄県立北部病院 小児科
#3 専門医 比嘉 詠美 先生 / #4 専攻医 照屋 勝 先生

P.12 沖縄県立宮古病院 小児科 埼玉県立小児医療センター 新生児科
#5 専攻医 與西 涼 先生 / #6 専門医 伊元 栄人 先生



Muru Uchina Voice ~ 沖縄の小児医療を担う医師たち ~

P.14 臨床・研究・教育は三位一体 沖縄の小児医療の“発展”を担う

#1 琉球大学大学院 医学研究科 育成医学(小児科)教授 中西 浩一 先生

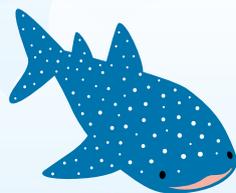
P.15 障がい児と家族が笑顔になる小児在宅医療の充実を目指して

#2 沖縄県医師会 理事 / Kukurukiguruklinik 院長 當間 隆也 先生



Muru Uchina Test

P.16 ムルウチナー検定





Muru Uchina

Top Interview

病院の垣根を越え、沖縄全体で 小児科医を支え、育て、未来を創る

医師／沖縄県保健医療介護部長 **糸数 公** 先生 Toru Itokazu

小児科医として離島医療にも従事。その後、公衆衛生医の道に進み、
沖縄の保健医療を支えてきた沖縄県保健医療介護部の糸数公部長に聞く
沖縄の小児医療と、沖縄で小児科医になる意義とは――。

糸数部長は、沖縄県立中部病院で小児科の研鑽を積んだ後、座間味診療所に赴任。島の働き盛り世代が未受診によって病気を発症する状況を目の当たりにし、公衆衛生医の道に進んだ。2009年には沖縄県の結核感染症班長として新型コロナウイルスの猛威にも対応。コロナ禍では統括監として県の新型コロナ対策本部で陣頭指揮を取り、記者ブリーフィングで感染状況などを毎日報告していたことは記憶に新しい。

「不在も起きています。さらに、時間外受診者の割合も全国1位。需要に対して供給が追い付いていない状況です」
沖縄県保健医療介護部の糸数公部長は沖縄の小児医療の現状をこう語った。

歴史から見えてくる 沖縄の小児医療の“強み”

沖縄県は、人口に占める15歳未満の子どもの数が16・1%（全国平均11・4%）と全国で最も高いなか、小児科医師の偏在指標では全国44位と小児科医不足が大きな課題となっている。



Interviewee

糸数 公 先生

Toru Itokazu

Title

沖縄県保健医療介護部長

Profile

沖縄県那覇市出身。1990年、自治医科大学卒業後、沖縄県立中部病院にて臨床研修。1992年から2年間、小浜診療所に勤務。沖縄県立中部病院小児科で後期研修。1995年、座間味診療所に赴任。1997年より公衆衛生医師として保健所勤務。1999年、国立公衆衛生院専門課程修了。2007年、沖縄県福祉保健部健康増進課。感染症担当班長として新型コロナウイルス対策室専任チームを兼任。2016年、沖縄県保健衛生統括監、2022年より現職。



沖縄県は小児科医不足だが、小児医療の質が全国と比べて低いわけではない。沖縄の歴史を振り返ると、むしろ、強みが見えてくる。

「今では全国で当たり前のように導入されている、EPR型救急を組み入れた臨床研修が1967年に県立中部病院でスタート。1972年には沖縄県小児保健協会が設立され、乳幼児の集団健診が実施されました。日本復帰時の沖縄は医療分野の人材が不足しており、各市町村が単独で医師を集めることが難しく、集団での健診を実施する必要があったからです。

病院医療も充実しておらず、公衆衛生に力を注いできた歴史背景もあり、沖縄県の小児科医は幅広い診療能力だけではなく、公衆衛生マインドが強いことも特徴です」

● 沖縄の医療の歴史は感染症流行との闘いでもあった。沖縄県では1998年の麻疹流行により9名の乳幼児の命が失われたことから、2003年に「はしかゼロプロジェクト」として感染症サーベイランスを実施。全国に先駆けて迅速な検査システムを確立した。

そして2006年には、全国でも数少ない、こども

課題があるからこそ チャレンジできる

● 病院を併設した、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターが開院し、沖縄の小児医療は大きく前進する。

「小児の重症疾患も県内で治療が完結できるように、2016年には全国10番目となる小児救命救急センターにも指定されています」

● 沖縄県は壮年期の死亡率が高く、平均寿命の順位も低下している。母親の喫煙や痩せなどを原因とする低体重児の出生率も高いなど、医療課題は多い。沖縄県ではこうした状況を改善するため、当時担当課長として、2013年に「健康長寿復活プロジェクト」を始動。その一環として、イラストを豊富に使用した小中学生用の「次世代の健康づくり副読本」を作成し、子どもの頃からの健康教育にも取り組んでいる。

● こうした、沖縄県の医療の歴史や医療課題に対する取り組みは、他県にはない貴重な経験の堆積であり、沖縄独自の、強みでもある。沖縄県が抱える多くの医療課題や小児科医不足という環境も、裏を返せばチャンスのもさであり、小児科医として、大いにチャレンジできる環境にあると言える。

● 沖縄県では、小児科医を育成・確保するために、琉球大学の地域枠や修学資金の貸与はもちろん、オンライン診療も推奨している。

● また、小児救急適正受診のための「小児救急電話相談事業（#8000）」の実施、2024年には適正受診を県民に呼びかける記者会見を行い、「#8000公式LINEアカウント」を開設し利用促進を図るなど、県民への発信にも取り組んでいる。

● さらに、小児科医を目指す医師にとつて沖縄県は、心強い環境にあることも特徴だ。系数部長は自信をもって語る。

● 「沖縄県は、県内16臨床研修病院を中心に関係機関が密に連携・協力し合い、病院の垣根を越えたオール沖縄で小児科医を育成しています。県全体で小児科医を支え、育てる体制にあることも大きな特徴。安心して沖縄県で小児科医を目指し、公衆衛生マインドをもった小児科医として大いに活躍してほしいですね」

● 系数部長の趣味は45歳から始めたランニングだ。健康増進を目的に始めたが、月間走行距離100kmという目標を掲げて挑戦を続け

沖縄の“心強い環境”で 小児科医を目指す

● た結果、フルマラソンのベストタイムは3時間51分。4時間以内の完走はサブ4といわれ、一人前ランナーの勲章だ。小児科医不足は全国的な課題でもあるが、沖縄県では離島や本島北部の地域医療を守ることも重要であり、他県とは状況が異なる。小児科医不足の解消は特効薬のない難しい挑戦だ。壁は高いが、系数部長は新型インフルエンザの猛威やコロナ禍という困難な状況も打破してきた。

● 「子どもたちがいつまでも健やかで豊かな人生を過ごせるよう、小児科医を沖縄県全体で支え、育て、充実した医療提供体制の確保を目指すべくこれからも尽力していきたい」と、系数部長の言葉に力がこもる。

● 未来を創るのは子どもたちだ。沖縄の小児科医たちを支え、沖縄の小児科医を育てることは沖縄の未来を創ることでもある。系数部長は未来のゴールに向かって全力で走り続ける。

Q. 系数先生にとって沖縄とは？

A. 大いにチャレンジできる場所



「沖縄の子どもたちが健やかに成長し、生きがい満ちた人生を歩めるように——。副読本『くわちら〜さびら』には、そんな願いが込められています」
系数部長

Special Interview #01



離島・全国・世界で活躍できる

真に実力のある小児科医を育成

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
医療部長 兼 新生児内科部長
小児科専門研修プログラム統括責任者

大城 達男 先生 Tatsuo Oshiro



小児の専門科が充実し 高度医療にも強い病院

病院機能「新興感染症対策」「災害医療拠点病院機能」「移行期支援」といった、10もの大きな機能・役割を担っている。小児に関わる内科系・外科系の専門科が揃っており、幅広い周産期症例に対応。県内で唯一、先天性心疾患の手術ができる施設

設でもあり、小児の重症患者が県全域から搬送されてくる。

小児科専門研修プログラム統括責任者である大城達男先生は、当センターで目指すことができる医師像についてこう語った。

「沖縄という地理的特性上、小児

医療のほぼすべてを県内で完結しなければなりません。さらに当院は県内唯一のこども病院として多方面からの多彩な患者が集中しており、診断から治療、退院後の外来フォローまで一貫して診ることができる。こうした環境を活かし



モットー
しっかり働きしっかり遊ぶ

趣味
野球、ゴルフ

好きな郷土料理
沖縄そば

沖縄の魅力
自然いっぱい。おらかな人が多いです！

オススメのスポット
沖縄全体が観光スポット
みたいなところですよ！

Interviewee

大城 達男 先生

Tatsuo Oshiro

Title

沖縄県立南部医療センター・
こども医療センター
医療部長 兼 新生児内科部長
小児科専門研修プログラム統括責任者

Profile

沖縄県豊見城市出身。専門分野は新生児医療。1997年、琉球大学医学部卒業後、同大学小児科に入局。豊見城中央病院、ハートライフ病院、鹿児島市立病院などを経て、2007年より沖縄県立南部医療センター・こども医療センターに勤務。日本小児科学会小児科専門医・指導医、日本周産期・新生児医学会周産期専門医・指導医(新生児)、医学博士



た研修によって、どんな場所でも活躍できる、ジェネラルな実力をもった小児科医になることができます」

当センターでは、2006年の開院以来、93名もの優れた小児科医を輩出しており(2024年までの実績)、卒業生は県内のみならず、離島や全国、さらには世界で活躍している医師もいる。

当センターの小児科専門プログラムの理念は、島で、最低1年、一人でやれる小児科医を育てる。専門研修の最初の2年間は、当センターにて、救急、新生児、集中治療、各種臓器専門診療を満遍なく

“島で、最低1年、一人でやれる小児科医”を育てる

「トも大事にしていきます」
さらに、当センターでの専門研修では、子どもたちの「こころの成長」に関わることも大切にしており、イベントに力を入れていくことも特徴だ。
「ひな祭りやクリスマス会、沖縄の冬の風物詩であるムーチーといったイベ

経験。3年目は、離島・地域の県立病院にて、救急・空輸を含む搬送・入院・外来・在宅連携といったトータルケアができるジェネラリストとして、独り立ちのための研修を行う。

「専門医取得に必要なすべての症例に臨床暴露でき、必要手法も十分な数が確保されている。要約(経験症例レポート)も早めに仕上げることができ、学会発表や論文作成指導も充実しています。離島・地域研修で困った症例に遭遇しても同じ仲間として僕たちにいつ何時でも連絡・相談することができ

決して一人で悩むようなプログラムではありません。メンター制度も導入し、面談では研修の現状確認だけではなく、精神的なサポート

ントに専攻医も参加し、子どもたちの笑顔のために一所懸命に取り組む。他の病院でも行われていますが、ここではイベントへの力の入れ方が他病院よりも大きいんです」

沖繩には昔から相互扶助の精神である、ゆいまーる。が根づいており、大学病院、県立病院、地域の小児医療病院施設、各医師会が仲間意識をもち、沖繩はひとつ、という認識で小児医療の課題に取り組んでいる。

「沖繩県は病院同士の垣根も低い。日本の出生人口は70万人を切り、少子化が確実に進んできているなか、沖繩県の出生率は全国より高く推移し、子どもの数が多いことも特徴。そういった意味でも、沖繩県は小児科医としての研鑽や成長に最適な場所だと思います」と、大城先生は胸を張る。

「医学生たちの間では、少子化」という言葉が独り歩きをし、小児科希望の医師は全国的に減ってきている。しかし、未来の社会を担うのは子どもたちであり、少子化であっても小児科医の果たす役割や必要性は極めて大きい。

「将来、子どもがいなくなること

小児科医は未来を創り社会を支える医師

「自分が自立して生活できるよ、自律性を重視した取り組みも重要。小児医療の課題も多く、少子社会であっても小児科医の重要性は高まっており、やりがいも無限大です」と、大城先生の言葉に力がこもる。

大城先生の専門は新生児医療だ。その道に進んだのは、自身が未熟児で生まれてきたことが大きい。大城先生が医師になった当時は新生児

の死亡率は高く、どうにかして改善できないかと考えていた。現在は医療の進歩によって助かる命は増えたが、後遺症をもつ新生児も増えた。沖繩県は新生児数も多く、大城先生は新生児の将来のために、いかに後遺症なき生存に貢献できるかを考え続けている。

命が助かったからといって、医療がそこで終わってはならない。子どもたちの長い人生はそこから始まるのだから。大城先生は子どもたちの幸せを追求し、共に沖繩の未来を創る仲間を育てる。



Hospital

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター

〒901-1193 沖縄県島尻郡南風原町字新川118-1

TEL:098-888-0123

<https://nanbuweb.hosp.pref.okinawa.jp>



Special Interview

#02



確かな臨床力、高いリサーチマインド、
強い専門性を有する優れた小児科医に

琉球大学病院 小児科
小児科専門医プログラム 担当者
周産母子センター 副部長 准教授

吉田 朝秀 先生 Tomohide Yoshida

琉球大学小児科専門医プログラムは、県内有数の連携施設や関連施設と相互に連携を図り、病院機能や特徴の異なる各施設での研修を通して、プライマリ・ケア、救急、二次医療、三次医療、周産期医療、希少疾患をもれなく経験できることが特徴だ。

琉球大学の小児科専門医プログラム担当者である吉田朝秀先生は、大学病院で小児科医を目指す強みについてこう語った。

「沖縄県は歴史的に県立病院での研修が有名であり、離島で自立して診療できる実力を得る優れた研

研修バランスの良さが特徴 リサーチマインドも獲得

修システムが確立されています。一方、大学病院の強みは、離島だけでは完結できない疾患や難病の治療、高度な診療領域もバランスよく研鑽でき、かつ医療人として生涯学び続けるための高いリサーチマインドを養成できることです」

離島研修についても、県立病院は専攻医3年目からだが、琉球大学小児科でも3年目の後半から可能であり、離島であっても学会参加や論文作成の支援はしっかりと継続される。

「機を見て学位を得ることも、臨

床医、研究者、教育者、リーダーとしての選択肢が広がり、医師としての深みも生まれます。学位取得は医療の発展や社会貢献といった役割を果たせるため、長期的な視点で見ても大きなメリットがあります」

さらに、大学病院にはさまざまな人材が集まっており、その働き方も多様であることが特色だ。

「育児などによって臨床ができな

モットー
一意専心

趣味
各地域の散策、琉球庭園や公園の散策

OFFの過ごし方
時々バドミントン

好きなお店
那覇市安謝の「沖縄そば Ajazz(あじゃず)」

オススメのスポット
ホームセンター「メイクマン」

Interviewee

吉田 朝秀 先生
Tomohide Yoshida

Title

琉球大学病院 小児科
小児科専門医プログラム 担当者
周産母子センター 副部長 准教授

Profile

沖縄県那覇市出身。専門分野は新生児医療。1995年に琉球大学医学部卒業後、同院で初期研修を経て埼玉県立小児医療センター未熟児新生児科に勤務。2001年、琉球大学医学部附属病院小児科医員、2007年、同病院小児科助教、2009年、琉球大学大学院医学研究科博士課程修了、同病院小児科講師、2013年、周産母子センター副センター長、2021年、同病院周産母子センター准教授。日本小児科学会小児科専門医・指導医、日本周産期・新生児医学会専門医、医学博士



医局にて兼次拓也医局長と

い状況でも、休業という選択肢だけではなく、多様な働き方を提案できる。休業から臨床復帰へのリハビリにも最適です。また、琉球大学小児科での専門研修は入局を条件にしていませんし、進路の強制もありません。専門研修では医局に入らなくとも、医局のネットワークや、多様な働きへの対応力といった医局のメリットを上手く活用してほしいですね」

● 沖縄県の小児医療は、高い専門性をもった、スペシャリストが高齢化し、後継者不足も課題となっている。だが、後継者不足は、自らが後継者として名乗り出るチャンスでもあると吉田先生は言う。「初期研修から『自分はこの分野

のリーダーになる』と積極的に手を挙げ、将来のスペシャルティを早くから意識して研鑽を積んでほしいですね」

● 吉田先生は周産期専門医であり、将来、周産期をサブスペシャルティに考えている医師たちに向けて、各周産期施設を複数ローテートができる研修プログラムの実現にも取り組んでいるところだ。

● また、キャリアパスを描く際には、医療現場全体を俯瞰し、課題を解決していくことも不可欠だと吉田先生は語る。

「特にサブスペシャルティの確立を目指す場合には、得られた専門性をどこで還元するかを重要視する必要があります。さらに、サブスペシャルティを本格的に学び始めるときは小児科専門医を有しているため、地域医療チームの重要な存在となっていることも多い。県外や海外で研鑽を積む場合には、自分の抜けた穴を埋めるチームの支援者も必要。キャリアパスを描く際は、仲間と協力していくことも不可欠です」

● さらに吉田先生は、常に、長い目線と高い目線を持って研鑽を積むことが大切であるとアドバイスを送る。

“長い目線と高い目線”で 医師人生は大きく変わる

「いま、目の前の仕事で自分にとってメリットがなくても、長い目線でみると将来必要である可能性もある。長い目線で考え、高い位置から俯瞰して物事をみて、常に高みを目指し続けること。そうした意識を持つか持たないかで、その先の長い医師人生は大きく変わります」

● 吉田先生は沖縄県を、日本の医療課題の縮図だと言う。沖縄県は、離島医療だけではなく、貧困問題、不十分な交通インフラによる搬送問題など、日本全国に存在する医療課題を網羅している。加えて、沖縄県は低体重児や重症出生児も多い。

「そうした環境のなかで得られる小児科医としての実力は、どこよりも幅広く大きいはず」と、吉田先生の言葉に力がこもる。

● さらに、ストレスフリーに働ける環境も沖縄県の大きな魅力だ。

「学会に参加するときなど、大学や県、市中病院と施設の垣根を越えて懇親会が開かれます。みんな顔見知りで、常日ごろ連携協力している間柄なので仲が良い。人間

沖縄で得られる実力は幅広い ストレスフリーな環境も魅力

● 関係の良さや仕事のしやすさなど、ストレスフリーな環境も魅力です」



● 近年、小児医療の進歩は目覚ましく、新生児や乳幼児期に亡くなる子どもは減り、かつては不治の病だった小児白血病も治る病気となった。

「子どもが元気になることは、誰にとっても幸せなこと。小児科医は一日100人を診て大変という人はいますが、つらいという人はいません。子どもが笑顔でバイバイと手を振って帰る。未熟児の退院の先には80年もの長い人生がある。それは僕にとつて何物にも代え難い医師としての大きな報酬であり、医師人生の支えとなっています」

● そう言って、吉田先生は優しい笑みをこぼす。小児科医として医師人生を歩む意義は大きく、やりがいと喜びは計り知れないほど大きい。



Hospital
琉球大学病院
周産母子センター
〒901-2725
沖縄県宜野湾市字喜友名1076番地
TEL:098-894-1301
<https://www.hosp.u-ryukyu.ac.jp/departments/syusann.html>





喜びと成長をみる喜びがある 病気を治す喜びがある

小児科専攻医である長谷部郁先生は、初期研修から沖縄県立南部医療センターへも医療センターで研鑽を積んでいる。医学学生時代は、内科か小児科に進むかで迷っていたという長谷部先生。

小児科をたくさん経験することで、どちらに進むべきかを判断できると思い、救急外来でも小児患者が半数を占める当センターを初期研修先に選んだ。「ギリギリまで進路に迷いましたが、阿嘉島や外病院で研修をした際に大人だけを診る機会があり、小児科でしか得られないやりがいや喜びがあることを実感し、小児科に進むことを決めました」長谷部先生が感じた小児科ならではの魅力とは何だろうか。

「成人とは異なり、子どもは治療して数日後には見違えるように元気になり、『先生ありがとう』と元気に手を振って帰っていく。入院してきたときは首がすわりはじめたくらいの子どもの、やがて寝返りをうって、お座りをするようになり、退院後の外来では歩くようになってきているなど成長が目に見えてわかる。小児科は病気が治る喜びに加え、成長をみることでできる喜びもあるんです」

困っても“なんとかなる” 安心の研修環境

当センターは、救命救急センターを備え、小児科の各専門分野が揃う高度多機能病院であることが特徴だ。「救急のファーストタッチ、外来、そしてNICUや沖縄県唯一のPICU

では高度な全身管理も経験できる。県内唯一の先天性心疾患の手術ができる病院であり、重症例や急性期を診る機会も多い。一次から三次まですべて対応し、かつ幅広い年齢層を経験できることが強みです」加えて専攻医は初期研修医からの相談も受けることも多く、教えることで自身の学びも深めることができる。各専門科の医師にも相談しやすく、雰囲気の良いも抜群だ。「いつでも相談でき、困ったことがあっても、なんとかなる。環境だ

から、『新しいことにもチャレンジしたい』という気持ちにさせてくれる。私は心配性でなかなか前に出られない性格でしたが、そんな人でも大丈夫です」

さらに、長谷部先生は当センターで小児科医としての研鑽を積み、楽しさを、優しい笑顔でこう語った。「クリスマスやハロウィンなど、子どものイベントも多く、クリスマスには子どもたちと一緒にダンスを楽しみ、ハロウィンのときは院内の一部をハロウィン仕様に飾り、子どもたちがトリック・オア・トリートと言いながらお菓子をもらいにまわる。そうしたイベントに携わることができると大きな魅力。普段でも、朝のラジオ体操と一緒にしたり、子どもたちといろんな話をしながら楽しく回診をしたりと、ここには小児科医としての幸せや喜びをたくさん実感できる環境があるんです」

長谷部先生の子どもの見つめる優しい笑顔の裏には、小児科医としての確固たる信念と志がある。将来、長谷部先生は小児アレルギーの道に進もうと考えている。その理由を聞くと、「アレルギーなら一人でも診ることがができる。医療設備が整っていない離島やへき地でも貢献できるからです」と、力強い言葉が返ってきた。沖縄の地域医療には明るい光が差し込んでいる。



Interviewee

沖縄県立南部医療センター・
こども医療センター
小児部門 専攻医

長谷部 郁 先生 Iku Hasebe

【出身地】沖縄県石垣市

【出身大学】琉球大学医学部

離島・北部枠(2021年卒)

琉球大学医学部の離島・北部枠を卒業後、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターにて初期研修。同センターの小児科専門研修プログラムに進む。

趣味

映画・ドラマ鑑賞
美味しいものを
食べる

沖縄の住民の印象は？

患者さんもお家族もおおらかで接しやすい方が多い

モットー

なんとかなる

好きな郷土料理

フーチャンプルー、沖縄そば、
島らっきよの天ぷら

オズズメのイベントやスポット

北谷、キングスの試合観戦、
OKINAWA FOOD FLEA

#1 沖縄の離島・へき地医療に
貢献できる小児科医を目指して



Interviewee

沖縄県立南部医療センター・
こども医療センター 小児部門 専攻医

那須 寛生 先生 Hiroo Nasu

[出身地] 沖縄県那覇市

[出身大学] 琉球大学医学部地域枠(2022年卒)

琉球大学医学部の地域枠を卒業後、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターにて初期研修。同センターの小児科専門研修プログラムに進む。



モットー
感謝の心を忘れずに

沖縄の魅力
住民同士の結びつきが強く、穏やかでフレンドリーな印象。特に高齢の方々は医者に感謝して下さることが多いです。

OFFの過ごし方
ドライブ、買い物、カフェに行って本を読む

オススメのイベント
那覇大綱挽

好きな郷土料理
タコライス

#2 喜びと幸せな瞬間を多く経験 子どもの手紙が大きな原動力に

離島でも自信を持って 診療できるスキルを得る

那須寛生先生が小児科医を目指したのは、子どもの頃、アレルギー体質でかかりつけの小児科に通っていた経験が影響している。

「小さい頃は病院が怖くて、廊下を逃げ回ったこともある(笑)。でも、診察後に先生が褒めてくれたり、治療について丁寧な説明をしてくれたり、注射が全然痛くなかったりと、先生の「ごさ」を中学生くらいになって実感し、小児科医という仕事に興味を持つようになりました」

那須先生は沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで初期研修を行い、小児科の専門研修も引き続き当センターで行っている。ここでは、救急対応、NICUやPICUでの全身管理、外来では多彩な主訴で受診する患者の初診から関わり、自分で鑑別を挙げ、診察、検査、フォローまで一貫して担当する。救急や当直では初期研修医からのコンサルトを受けることも多く、指導を通して学びを深めることもできる。

「離島に向かうドクターヘリの同乗を経験した同期もいます。当院では、島で、最低1年、一人でやれる小児科医を育てる」という研修目標が病院全体の共通認識としてあるため、すべての先生方、そし

てコメディカルのみなさんも教育熱心。困ったことがあれば、いつでも相談できる環境も大きな魅力です」

小児科医としての喜びを 実感した患者からの手紙

● 那須先生が専攻医になって半年の頃。「けいれん重積」で救急搬送されてきた中学生を担当した。入院後もけいれんを繰り返し、付き添っていた親も不安が強く、涙ながらに質問されることもあった。自分の経験や知識不足を痛感しながらも自分の言葉で現状や治療方針を説明。一日に何度も回診し、積極的に患者と家族に話しかけた。

「なんとか回復し、退院することができましたが、患者さんや家族に胸を張れるよう、これまで以上に学んでいかなければと強く思いました」

那須先生は同時に、小児科医としての大きな喜びも経験した。患者は退院する際、お世話になった医師や看護師たちに向け、一人ひとりの印象を添えた手紙を書いた。

患者が那須先生に向けて書いた言葉は、「いつも朝早くいて、夜遅くまでいる」

「けいれんでつらいなか、自分の頑張りがもしっかり見てくれていたんだと、すごく嬉しかったですね」

その言葉は那須先生の大きな原動力となった。さらに、小児科医のやりがいは、「子どもの発達成長過程を家族と共にみることができること」だと、那須先生は語る。

「家族とも深く関わるため、みんなでも子どもの成長を支えていくという連帯感があり、子どもが元気になった喜びをみんなでも共有できる幸せがある。外来で、『こういうことができるようになったんです』という家族の言葉も、小児科医としての大きな喜びであり、幸せなことですよね」

専攻医は自分にできることは何かと模索し、悩むことも多い。だが、それ以上に小児科では喜びと幸せな瞬間を多く経験することができる。子どもの笑顔という大きなエネルギーをもらえることも小児科医の特権だ。那須先生に疲弊の色は一切なく、絶えず明るい笑顔が輝いていた。





沖繩の小児医療は “良いサイズ感”が魅力

比嘉先生は琉球大学医学部に地域枠1期生として入学。初期研修は救急搬送件数が県内有数であり、小児患者数も多い那覇市立病院で行った。

「子どもは大人と違い、治療をすれば元気になることが圧倒的に多い。子どもたちのたくさん笑顔を見られることが小児科の大きな魅力。初期研修で小児医療を多く経験したことで、小児科医を目指す気持ちがより一層強くなりました」

実は、比嘉先生は初期研修医時代の2016年に、ムルウチナー創刊号(1号)にも登場している。当時から小児医療への熱い思いを語っていた彼女が、今や地域の小児科医として活躍している姿は、医師としての歩みの確かさを物語っている。

3年目は琉球大学小児科専門医プログラムに入り、関連施設や地域枠の義務として石垣島の八重山病院な



どで研鑽を積み、小児科専門医を取得。2022年から沖縄県立北部病院に勤務している。

「沖縄で小児科医として研鑽を積む大きな強みは離島医療を経験できること。八重山病院では、重症患者さんを本島に送る際は空路がなく、迅速な判断が求められる。一般病棟とNICUと救急を一晚のうちに一人で診るといふ経験はなかなかありません。若くして任

され、自分で判断する場面も多く、一人で何でも診ることができると力を養うことができます」

そうした、一人で診る環境で働くことに、比嘉先生は特に不安を感じなかったと言った。

「沖縄県の小児医療の魅力は、良いサイズ感。先生同士の顔が見え、病院の垣根を越えていつでも何でも相談ができる。医療資源の少ない離島環境であっても、安心して診療に臨むことができます」

“子どもの地域医療”を 色濃く経験できる場所

比嘉先生が現在勤務する県立北部病院は、沖縄本島の半分を占める北部地域のなかで、一般小児における唯一の入院施設を持つ。24時間体制で小児救急を担う北部地域の

の砦となる病院であり、新生児対応も行う。さらに全国的にも珍しい虐待対応や特定妊婦への

の見守りを、密な地域連携でサポートしていることも大きな特徴だ。

「虐待や特定妊婦を早めにアセスメントし、必要に応じて行政と連携しながら母子をサポートしていく。さらに医療的ケア児やその家庭のサポートも病院全体、行政地域の保健所、施設、訪問看護、学校などと連携して支えるなど、子どもの地域医療を色濃く経験できることも特徴です」

比嘉先生は2019年に結婚。現在、子育て中ではあるが、日中は子どもを保育園に預け、迎えは夫が担当。家族の協力もあってフルタイムで勤務をしている。

「子育て経験が強みになることも小児科の魅力。親の気持ちがよくわかりますし、育児のアドバイスもできる。子育てをしながらフルタイムで働き、当直を月に6回している先生はあまりいないと思いますね」と、比嘉先生は笑う。小児科や地域医療は大変だと言われているが、比嘉先生の姿はそれとは全く逆だ。

「どの診療科でも、どこで働こうとも大変なことはある。でも、沖縄県で小児科医を選んだ後悔したという先生は、先輩たちに聞いても誰一人いません」

そう力強く語った比嘉先生の表情には、小児科医としての自信と誇りと充実感が満ちていた。

Interviewee

沖縄県立北部病院 小児科 専門医

比嘉 詠美 先生 Eimi Higa

【出身地】沖縄県島尻郡

【出身大学】琉球大学医学部地域枠(2015年卒)

琉球大学医学部の地域枠1期生。卒業後、那覇市立病院で初期研修。琉球大学病院の小児科専門医プログラムに進み、大学の他、関連施設である那覇市立病院、中頭病院、さらに地域枠の義務として石垣島の八重山病院などで研鑽を積み、2022年より沖縄県立北部病院に勤務。日本小児科学会小児科専門医



モットー
なるべくいつも
笑顔で過ごす

ガス×マイペル
カレーフェス

OFFが通じ方
子どもと遊ぶ、
サブスク鑑賞

趣味
音楽鑑賞
好きな郷土料理
へちまの味噌煮

#3 小児科は“後悔しない”診療科 子育て経験も強みになる





Interviewee

沖縄県立北部病院 小児科 専攻医

照屋 勝 先生 Masaru Teruya

[出身地] 沖縄県豊見城市

[出身大学] 琉球大学医学部地域枠(2019年卒)

琉球大学医学部の地域枠を卒業後、初期研修は琉球大学病院の“たすき掛けコース”を選択し、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターでも経験を積む。同センターの小児科専門研修プログラムに入り、2024年に沖縄県立北部病院に赴任。



モットー
初志貫徹

OFFの過ごし方
料理、工作、美術館・博物館巡り

趣味
折り紙、絵画

好きな郷土料理
沖縄そば

沖縄の住民の印象は?
優しい



“みんなで子どもの幸せを創る” 沖縄には小児科医の醍醐味がある

“生活を支える”ことも 小児科医の大切な役割

照屋勝先生が小児科医を目指したのは、母親が特別支援学校の教諭だったことが大きい。「ハンディキャップを持っている子どもたちの助けになりたい」と、ずっと思っていました。

初期研修は琉球大学病院の、たすき掛けコースを選び、小児医療に強い沖縄県立南部医療センター・こども医療センターでも経験を積んだ。専門研修は同センターの小児科専門医プログラムに進み、専攻医3年目の離島・地域研修として2024年から沖縄県立北部病院で研鑽を積んでいる。

「県立北部病院は、本島の半分の面積を占める沖縄北部の地域医療を支える中核病院です。コモンディーズが多いですが、専門病院に送る必要がある重症例もあり、それを取りこぼしできない緊張感もあります」

県立北部病院では、専門治療後や慢性期の子どもの受入れ、さらに子どもと家族の日常生活を支えるという重要な役割も担っている。「たとえば、胃ろうの子どもには、『なんとか口から食べさせたい』という家族の想いもある。それを叶えるためにはどう介入したらいいのか。子どもが通う小学校にリハビリスタッフを派遣し、担任の先

生に安全に食べる技術を教えるなど、制度も含めていろいろな可能性を考える。小児科は患者本人だけで医療が完結することは少なく、みんなで子どもの幸せを創る仕事。そんな小児科の醍醐味を実感できることも当院の魅力です」

子どもの笑顔を守り 豊かな人生を創る

地域医療の現場ではマシパワー不足により、自分で解決しなければならぬ場面も多い。それは成長できるチャンスのもちでもある。

「自分が成し遂げたこと、経験して学ばからこそ、次に同じ症例や問題に遭遇した際にはスムーズな対応ができるようになる。治療だけではなく、子どもたちの生活や成長を支えるための社会制度、地域連携といった経験もそう。ここでは幅広く対応できる問題解決力をもった強い小児科医を目指すことができます」

照屋先生に小児科医にとって大事なことを聞くと、こんな答えが返ってきた。

「子どもの笑顔をつくることです。そう言って、胸元にある名札のストラップを延ばしてみせる。

「僕は子どもの心をつかむ一発芸も大事にしているんです。『これあげるね』といって名札を子どもの

目の前に差し出し、子どもが取るうとするとストラップが元に戻る。それを見て子どもたちはすごく喜んでくれる。その笑顔がずっと守っていきたいですね」と、照屋先生は微笑む。

照屋先生は、将来、小児精神科の道に進みたいと考えている。発達障害は低年齢で診断されるべきだが、診断の機会なく成人後に苦しむ人も多い。

「早期に診断し、適切な介入をすることで、成人後の長い人生を苦しむことなく過ごすこともできる。発達障害で困っている患者さんは多く、児童精神科のクリニックも順番待ちの状況。小児精神科医は全然足りていません」

病気を抱える子どもたちの、成人後の長い人生を少しでも豊かなものにしてあげたい。その強い思いで、今日も照屋先生は病気の子どもたちとその家族にひたむきに向き合う。



Hospital

沖縄県立北部病院

〒905-8512 沖縄県名護市大中2丁目12番地3 TEL:0980-52-2719 <http://www.hosp.pref.okinawa.jp/hokubu/>





不安なく離島医療に臨むことができる研修環境

「地元の小児クリニックの先生は、診察が終わった後に子どもをくすぐったりする先生で、とても人気がありました。将来、そういう先生になれたらなとずっと思っていたんです」

與西涼先生の出身は石垣島だ。島でも活躍できる小児科医を目指す、琉球大学医学部に地域枠で入学。初期研修は小児医療を多く経験できる沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで行った。専門研修も引き続き同センターの小児科専門研修プログラムに進み、専攻医3年目の2024年から離島・地域研修として沖縄県立宮古病院にて研鑽を積んでいる。

県立宮古病院は宮古群島を支える地域支援病院であり、軽症だけでなく重症の患者にも対応する。限られた医療資源を効率よく供給するため、地域の医療機関や施設

との連携も密であり、紹介患者も多い。小児科医は與西先生を含め、わずか4名だ。

「医療資源が限られた環境のなか、一般小児はもちろん、未熟児の管理や出生時の対応も行い、子どもの成長過程で起きる食物アレルギー、喘息、アトピー性皮膚炎、川崎病の発症など、とにかく幅広く診る。当直は一人で救急、新生児医療と何から何まで自分で診て判断し、決定する。自分が主体となつてやらざるを得ない環境だから、一つひとつの経験が確実に自分の力になるんです」

専門研修の最初の2年間で、島で一人で診る準備は整えてきた。だから不安はそれほどなかったと與西先生は笑顔で語る。

「困ったことがあれば他の先生にいつでも連絡できますし、院外の先生であっても、たとえば循環器なら南部医療センター・こども医療センターの小児循環器の先生、アレルギーなら沖縄協

地域の多職種連携も含め多彩な経験ができる病院

同病院のアレルギーマスターにも相談ができる。フィードバックもいただけるので安心です」

宮古島は保健福祉が充実しており、多職種連携・協働が強い地域で

もある。與西先生は市町村の保健師や福祉課などと直接やりとりしながら、神経発達障害の子どもたちに対する児童デイケアサービスの調整なども行う。宮古病院で得られる経験値は実に幅広い。

「地域の多職種連携も含め、とにかく多彩な経験ができるのが宮古病院。どんな場所でも活躍できる小児科医としての実力を獲得できます。将来のサブスペシャリティを迷っている先生にも、ここでの経験は非常に有意義なものになると思います」

與西先生が大切にしている言葉がある。それは、情けは人の為ならず、巡り巡って己が為なり。他の人のためにかけた情けは、巡り巡って自分に返ってくる。だから、人には無償の情けをかけること――。

「どんな状況にあっても、子どもたちの笑顔のために最大限の努力を惜しまない。そうして元気になった子どもたちが成長し、やがて小児科医を目指し、将来、僕の子どもや孫の主治医になるかもしれない。そうなってくれたら嬉しいし、子どもたちの目に映る、いまの僕の姿や言動が沖縄県の未来につながっていくと思うと、より気持ち引き締まりますよね」

與西先生は沖縄の小児医療の未来も見据えている。

Interviewee

沖縄県立宮古病院 小児科 専攻医

與西 涼 先生 Ryo Yonishi

【出身地】沖縄県石垣市

【出身大学】琉球大学医学部

地域枠(2020年卒)

琉球大学医学部の地域枠を卒業後、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで初期研修。同センターの小児科専門医研修プログラムに入り、2024年に沖縄県立宮古病院に赴任。



OFFの過ごし方
妻とカフェ巡り

趣味
動画視聴、喫茶探訪

好きな郷土料理
三枚肉

モットー
情けは人の為ならず
巡り巡って己が為なり

オススメのスポット
宮古島の来間島！橋を渡るだけで離島らしさをより感じます！

#5 宮古島での一つひとつの経験が小児科医としての大きな力に

Hospital

沖縄県立宮古病院

〒906-0013 沖縄県宮古島市平良字下里427-1

TEL:0980-72-3151

<https://miyakoweb.hosp.pref.okinawa.jp>





Interviewee

埼玉県立小児医療センター 新生児科
小児科専門医

伊元 栄人 先生 Eito Imoto

[出身地] 沖縄県浦添市

[出身大学] 琉球大学医学部地域枠(2018年卒)

専門分野は新生児医療。琉球大学医学部の地域枠を卒業後、沖縄県立中部病院の地域枠・小児科キャリアプログラムにて初期研修、専門研修を行う。2022年に沖縄県立北部病院に赴任。2024年より地域枠の規定の年限を中断し、埼玉県立小児医療センターの新生児科にて研鑽中。日本小児科学会小児科専門医、NCPRインストラクター



モットー

なんとかなる

OFFの過ごし方

旅行

趣味

ゴルフを趣味にしたい

オススメのスポット

首里城

好きなお店

地料理・旬菜「土香る」、沖縄そば「てだこ」

沖縄の患者さんの印象は？

治療に協力的で優しい

#6 家族の願いを叶えた国内初の挑戦 沖縄には“深く、長く寄り添う”医療がある

命の誕生を支え、 命の成長にも寄り添う

「わざわざ400グラムの生まれた子どもが、やがて歩けるようになり、今度は僕をめぐって走ってきてくれる。こんなに嬉しいことはないですね」
現在、沖縄を離れ、埼玉
県立小児医療センターの
新生児科で学ぶ伊元栄人先生から
大きな笑みがこぼれた。

「島医者に憧れて地域枠で琉球大学に入学。卒業後は沖縄県立中部病院で初期研修と専門研修を行った。中部病院はハードな研修で知られていますが、経験を重ねる毎にできることも着実に増え、スキルアップを実感できて楽しかったですね」

小児科のなかでも新生児医療を専門にしたのは、初期研修2年目に新生児医療を経験した際、指導医に届いた手紙に感銘を受けたことがきっかけだ。
「新生児として生まれた子どもが成長し、主治医だった指導医に感謝の手紙が届く。その手紙には『大きくしてくれてありがとう』と書かれていました。新生児医療は命の誕生を支え、かつ命の成長にも携わることができる。こんなに素敵な仕事はないですね」

2022年、伊元先生は沖縄県北部地域で唯一の小児急性期病院である沖縄県立北部病院に赴任した。県立北部病院では患者家族に、深く、

長く寄り添った医療を学んだという。「医療資源の少ない地域であるため、ここでは退院後も引き続き患者家族に寄り添い、支えていく必要がある。さらに、地域の支援機関や行政と連携しながら、虐待対応や特定妊婦のフォローを行っていることも特徴です。ここまでやっている小児科は全国でもなかなかないと思います」

沖縄だからこそ 経験できる医療がある

伊元先生は、県立北部病院で貴重な経験もした。県立中部病院時代に担当医となった24週で出生した超未熟児がいたが、県立北部病院に赴任してからは主治医として在宅医療の実現を目指し、患者の自宅のある伊平屋島への帰島に向けて取り組んだ。島は本島から船で80分の場所にあり、緊急事態への対応は難しい。そんな孤立型離島に人工呼吸器や経管栄養など医療的ケアが必要な患者を帰した前例はない。全国初の挑戦だった。

「母親の、自宅に戻りたい、伊平屋島で育てたいという願いを何としても叶えたいという一心で、無我夢中で取り組みました。当時、伊平屋診療所の医師は地域枠の同期(下地遼先生)ということもあり、連携が非常にスムーズにいったことや、看護師さん、島の保健師さん、消防団員の方々の協力、そして県立北部病院の小児科部長(佐々木尚美先生)が取り組んできた。顔が見える地域連携があったからこそ、帰島はもちろん伊平屋島で住み続けられる環境を実現できたのだと思います」

伊元先生は、地域枠の義務年限を中断し、2024年から埼玉県立小児医療センターで研鑽(3年間の予定)を積んでいる。沖縄を離れる日、空港には伊元先生への応援メッセージのプレートをもった患者家族らの姿があった。
埼玉県立小児医療センターは、国内最大規模の総合周産期母子医療センターであり、新生児の最重症患者が集約され、新生児脳低温療法といった特殊治療の症例も多い。
「ここで得たスキルを沖縄の新生児医療に還元したいですね」と伊元先生の表情が輝く。その真っすぐな瞳に映るのは、伊元先生が戻ってくるのを楽しみにしている患者家族や沖縄の子どもたちの笑顔だ。



空港に見送りにきた患者家族と



Hospital 埼玉県立小児医療センター

〒330-8777 埼玉県さいたま市中央区新都心1番地2 TEL:048-601-2200

<https://www.saitama-pho.jp/scm-c/>

※ TBS NEWS DIG Powered by JNN

でも特集されています。ご視聴はこちらから ▶▶▶

<https://www.youtube.com/watch?v=62AXdqjPzy4>



臨床・研究・教育は三位一体 沖繩の小児医療の発展を担う



Interviewee

琉球大学大学院 医学研究科
育成医学(小児科) 教授
琉球大学病院 副病院長

中西 浩一 先生 Koichi Nakanishi

[出身地] 大阪府

[出身大学] 神戸大学医学部(1989年卒)

専門分野は小児腎臓病。神戸大学医学部卒業後、同大学小児科に入局。米ケースウエスタンリザーブ大学留学を経て、2000年に和歌山県立医科大学小児科。小児腎臓病を専門に小児希少疾患や臨床研究に尽力。2017年より現職。日本小児科学会小児科専門医・指導医、日本小児腎臓病学会理事長、日本腎臓学会専門医・指導医・理事、医学博士

趣味

音楽鑑賞、ドラム演奏

沖繩の魅力

色々な意味で暖かい

好きな郷土料理

あぐー豚のしゃぶしゃぶ

オススメのスポット

首里城

多くが集い、力を合わせ、明るく楽しく、を目指して

琉球大学小児科の教授である中西浩一先生が目指してきた医局の姿は、ゆいまるの精神だ。

「協働作業を意味する、結い」と、廻るを意味する、まる。多くが集い、力を合わせ、明るく楽しく。そんな医局を目指してきました

小児科医は子どもの総合医であり、全身を診る力が求められる。琉球大学小児科では医局員全員が子どもたちの心(精神)や社会性の発達もマネジメントできるジェネラリストであることはもちろん、大学病院として専門性を高めていくことも大切にしている。

「希少疾患を一例一例、丁寧に診る医療が大学病院の特徴。さらに臨床だけではなく、大学病院の使命として研究も非常に重要です」

沖繩県は歴史的に県立病院が中心的な役割を担い、医療と臨床教育が行われてきた背景がある。そのなかで研究機関でもある大学病院は医療の持続的な発展に重要な役割を担っていると中西先生は語る。

「小児科医全員が臨床だけをしてしまえば小児医療の持続的な発展はありませぬ。そして研究は単独では成り立つものではなく臨床と教育との三位一体。常にリサーチマインドを持って診療にあたり、そこから生じた疑問を研究で解決していく。それを実践できるのが大学病院の強みです」

医局はオーケストラであり誰が欠けてもいけない

琉球大学小児科は、多様性も大きな強みだ。働き方や専門分野の選択肢が多く、一人ひとりの価値観やライフワークに合わせて研鑽を積むことができ、伸び伸びと力を発揮しやすい環境にある。中西先生はそんな小児科医局の特徴をこう例えた。

「医局はオーケストラに似ています。一つの曲を作り上げるのに、ヴァイオリンを弾き続けている人もいれば、シンバルを3回しか叩かない人もいます。でも、シンバルが欠けてしまえば、その曲は成り立ちません。一つの曲を奏するのに誰も欠けてはならない。それを全員が理解し、みんなで協力、助け合



いながら、一つの曲を作り上げる。そんな場所です」
座右の銘は、随処作主(ずいしょにしゅとなる)。
自分の置かれた場所で、主体的に努力すること。中西先生は若手医師たちにキャリアパスを描く際の大切なアドバイスを送る。

「所属する組織のために自分ができることは何かを考える。与えられた場所で主体的に努力を続ける。目先のことで将来の可能性を狭めてしまうのではなく、長期的展望に立っているんな経験を主体的に積み、自分の可能性を広げる努力をしてほしい」

そして中西先生は小児科医として医師人生を歩む魅力を、満面の笑みでこう語った。
「子どもたちに関わることができるのは、何よりも大きな喜び。これは理屈じゃないんです。僕がこれまで医師を続けられたのは、小児科医だったからこそ。そう言うっても過言ではありません」
そんな中西先生が舵取りをする琉球大学小児科で、多くが集い、力を合わせ、明るく楽しく、を motto に、子どもたちに関わる喜びを日々実感しながらキャリアを歩む。琉球大学で小児科医として成長していくことは、楽しく充実した医師人生を歩むことでもある。

障がい児と家族が笑顔になる 小児在宅医療の充実を目指して



モットー
正直に楽しく生きる

好きを郷土料理
豊見城のみーや小
(ミーヤグワー)のみそ汁

OFFの過ごし方
ゆっくりする、
本や漫画を読む、
庭いじり

沖縄の住民の印象は？
良い意味で適当(テー
ゲー)。建前が苦手な本音
で話してくれるのでこ
ちらも本音でやりやすい

趣味
おいしい物を
飲んで食べること、
読書

Interviewee

沖縄県医師会 理事
Kukuruきっずクリニック 院長

當間 隆也 先生 Takaya Toma

[出身地] 沖縄県島尻郡豊見城村(現・豊見城市)
[出身大学] 琉球大学医学部(1989年卒)

専門は臨床遺伝学。琉球大学医学部卒業後、同病院にて小児科研修。1994年、琉球大学大学院医学研究科生態制御系専攻修了。2006年、沖縄県立南部医療センター・こども医療センター小児科副部長、2007年、同センター小児神経科部長、2010年、わんぱくクリニック副院長、2021年から現職。日本小児科学会小児科専門医、日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医、医学博士

大切なのは支える医療
実感した、在宅の力

KUKURUきっずクリニックは、障がいや先天性疾患を持つ子どものためのクリニック。診療、短期入所、訪問診療によって在宅生活をサポートし、レスパイトケアも行う。院長を務める當間隆也先生の専門は小児の先天異常だ。臨床遺伝科医として沖縄県立南部医療センター・こども医療センターにも勤務したが、小児在宅医療の道に進むために退職。縁あって、当クリニックの院長に就任し、医療的ケア児とその家族の生活を支えながら、現在も同センターに週一回通い、遺伝相談外来や研究も行っている。「障がいのある子どもを病院で長く診てきて感じたのは、この子たちに必要なのは病院で診る医療ではなく生活を支える医療だということ。医療技術の進歩で医療的ケア児は増えていますが、治療後の生活を診るフォロワー体制は十分ではありません」

當間先生が小児在宅医療に携わって驚いたことがある。病院で「医療は予防が主だと思っんです。病気になるって病院に行くのではなく、病気になるまいよう、予防接種や健康管理で病院を利用するようになれば時間外診療も減っていく。それが自分の理想とする沖縄の小児医療です」

病院長らしくない病院で子どもと家族を笑って帰す

院内は優しい木目調で、かわいい動物のイラストや子どもたちの写真でいっぱい。屋上にはプールが完備され、夏には子どもたちが沖縄の青空と水遊びを楽しむ。クリニックのコンセプトは、病院らしくない病院だ。先天異常で治療法がなく、寝たきりであっても、目や耳が自由であっても、當間先生は普通の子どもと同じように接する。當間先生が診療の際、いつも心がけていることがある。それは、子どもと家族を笑って帰すことだ。「診察室はおまけみたいなもの(笑)。当院は子どもと家族が笑顔になる場所を目指しています」



「家族の絆や愛情が身近にあることが、いかに大切なことなのか。在宅の大きな力を実感しました」

同院では医学生の実習も受け入れており、小児在宅医療を体験し将来、その道に進む医師が一人でも多く誕生することを期待している。「普段診ている障がいのある子ども、きょうだい児が医学部に入り、『将来、先生のようになりたいので、ここで何かボランティアができませんか?』と言ってくれた。自分がこれまで取り組んできたことを家族に認めてもらえた。そのことがすごく嬉しかったですね」

院内には看護師たちが子どもに話しかける明るい声が響いている。スタッフが変装して、子どもを一所懸命に楽しませる。その光景を優しい笑顔で見つめる當間先生がいる。院内は笑い声で一杯になり、子どもたちの表情が活き活きと輝く。ここには医療の本質がある。





泡盛

Muru Uchina Test

ムルウチナー検定

答え欄

Q.01 沖縄の中で最南端に位置する有人島はどこ？

- A 石垣島 B 西表島 C 波照間島

Q.02 沖縄の伝統的な焼き物「やちむん」の語源は何を意味する？

- A 焼き物 B 土の宝 C 火の器

Q.03 沖縄県の県木に指定されているのは何の木？

- A リュウキュウマツ B ビロウ C ガジュマル

Q.04 沖縄の方言でよく使われる「なんくるないさ」の意味は？

- A 何とかなるさ B ありがとう C お疲れさま

Q.05 オリオンビールが初めて発売されたのは何年？

- A 1947年 B 1959年 C 1975年

Q.06 ゴーヤチャンプルーの「チャンプルー」とはどんな意味？

- A 混ぜ合わせる B 炒める C 切り刻む

Q.07 沖縄料理の定番「ジュシー」はどんな料理？

- A 豆腐料理 B 炊き込みご飯 C デザート

Q.08 沖縄の工芸品として有名な「琉球ガラス」の特徴は何？

- A 透明度が非常に高い B 割れにくい特殊加工 C 色鮮やかで豊富なカラー

Q.09 八重山地方に伝わる伝統芸能「アンガマ」とはどのような行事？

- A 豆を投げ合う行事 B 先祖を迎え供養する盆行事 C 海で踊る祭り

Q.10 沖縄を本拠地とするB.LEAGUE所属のプロバスケットボールチームは？

- A 琉球ゴールデンキングス B 琉球ゴールデンボーイズ C 琉球レッドキングス

正解が
0～3問

未来の
うちなんちゅ

正解が
4～6問

THE
うちなんちゅ

正解が
7～9問

スーパー
うちなんちゅ

全問
正解

ミラクル
うちなんちゅ

01.C波照間島 / 02.A焼き物 / 03.Aリュウキュウマツ / 04.A何とかなるさ / 05.B1959年 / 06.A混ぜ合わせる / 07.B炊き込みご飯 / 08.C色鮮やかで豊富なカラー / 09.B先祖を迎え供養する盆行事 / 10.A琉球ゴールデンキングス

泡盛



Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

「Muru Uchina(ムルウチナー)」第13号をお届けしましたが、いかがでしたでしょうか。

沖縄県地域医療支援センターは医師の地域偏在解消を目的とする組織です。

この冊子で少しでも私たちの想いをお伝えすることができれば幸いです。

ご意見・ご感想などお待ちしております。

発行

琉球大学病院

沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒901-2725

沖縄県宜野湾市字喜友名1076番地

TEL:098-894-1401

E-Mail:chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp/>



ムルウチナー バックナンバー



Vol.1



Vol.2



Vol.3



Vol.4



Vol.5



Vol.6



Vol.7



Vol.8



Vol.9



Vol.10

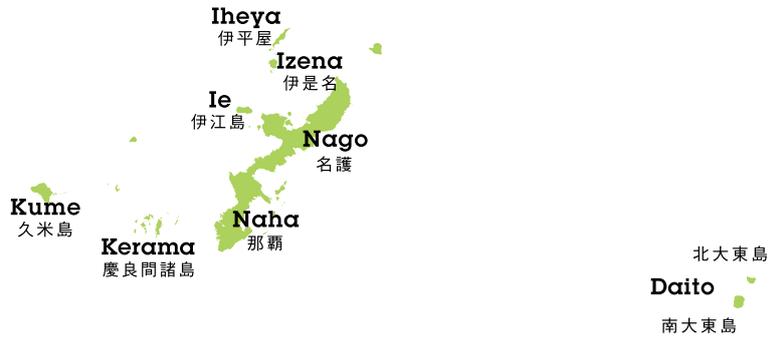


Vol.11



Vol.12





Yonaguni
与那国島

Ishigaki
石垣島

Miyako
宮古島

Iriomote
西表島

Hateruma
波照間島

琉球大学病院 沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒901-2725 沖縄県宜野湾市字喜友名1076番地

TEL: 098-894-1401

E-Mail: chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp/>

